

はじめに

本学の公開展示室は本館改修にともなって平成 13 年新たに開設された。以来、常設展示に加えて、年 1 度会期 2 週間程度の公開企画展示を開催している。常設展は主に複製資料を展示するのに対して、公開展示期間中は貴重な資料の現物を展示する。また、最近ではオープンキャンパス、EUIJ のフレンドリーシップウィーク等の学内外の特別なイベントにあわせた展示も行っている。

平成 17 年度は「オウエンから一橋へ：消費組合の成立と展開」というテーマを掲げ、オウエン関係および日英の消費組合に関する展示を企画した。会期は 11 月 1 日～11 日まで、祝日をのぞく 10 日間であった。この展示事業のために附属図書館・社会科学古典資料センター・経済研究所資料室・社会科学統計情報研究センターの構成員からなる 10 名のワーキング・グループで作業をおこなった。6 月頃からテーマ選定と調査、9 月頃からパンフレット作成と解説文作成と作業を進めた。期間中は 955 名の入場者があり、概ね好評であった。会期終了後も附属図書館のホームページ (<http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/tenji/owen/>) で電子展示を行なっている。

さて、図書館における展示は多くの大学図書館で行なわれているようであるが、それらについて報告した文献はあまり多くない¹。展示の方法論については、博物館学の解説書を中心に多数あり、テーマ設定や解説の書き方という面では参考になる。ただ、本学の展示事業はその内容もさることながら「資料保存に配慮した展示方法」を心がけている点が特徴である。この点では詳しい解説書はあまり多くない²。そこで、本稿では今年度の公開企画展示での実例を紹介したい。

1. 公開展示室の照明への対策

開設当初、公開展示室に設置された照明は蛍光管 16 箇所 32 本、スポットライト大 6 個小 6 個であった。資料保存の観点からは紫外線を除去することが重要である。センサーにより無人になると消灯するシステムを導入するとともに、順次、蛍光管を紫外線カットのものと取り替える作業を行っている。スポットライトは基本的には使用していない。

展示ケースは徐々に拡充していつているが、展示ケース内の照明もつけないことにしている。紫外線の影響が懸念されること、ケース内の温度が上昇してしまう可能性があること³がその理由である。

また、今年度の展示品の場合、オウエンの直筆書簡のような貴重な 1 枚ものの資料はなるべく垂直に近い角度に展示し、天井からの照明が当たらないように配慮した。(図 1) 彩色の資料の場合は、いっそうの配慮が必要である。今年度の公開展示では行わなかったが、平成 14 年度のように会期中での展示替えを実施したケースもある。

2. 資料の展示方法

資料を展示する際に、より良く見せたい、また展示品に変化をつけたいと思うあまり、貴重な資料に負担のかかる展示方法をとるのは慎むべきだと考える⁴。基本的には資料の背やページが湾曲するような無理な力がかからないように、資料を支えることを心がけている。

たとえば、複数の資料を重ねて展示することは極力さける。薄い資料は扇状に重ねて展示したくなるものだが、図書がゆがんだ状態になるので不適當である。和装本等で図書を閉じたまま題箋を見せるためにずらして重ねる場合は、必ず、ずれている部分に下から支えを入れている。パネルの余ったものを利用して高さを調整し中性紙で包んだだけでも十分な支えとなる。

展示したいページがある場合、該当ページを開くときに資料に対する負担をかけることになるので、細心の注意が必要である。のどが 120 度以上に開かないように書見台を利用するほうがよい。文鎮は金属製、木製、スネーク状のものを用意し、図書の形状に合わせて使用している。スネーク状のものは変形できて便利だが、重いのでページが変形するほどの過重な負担をかけないように一部だけ押さえるようにしている（図 2）。また、図書が厚く文鎮では該当ページを開いて押さえておくことができない資料についてはポリエステルのテープで資料の端を包むことで対応した（図 3）。

図書の装丁を見せるために立てて展示する場合には、ブックエンドでしっかりと固定する。立てて展示する資料はページを開くことは極力さけなくてはならない。展示ケースはハイケースの場合でも、基本的には図書を平置きしやすい形状のほうがよい。

3. 書見台の作成

今年度は、社会科学古典資料センター修復工房の指導・協力を得て、展示用の書見台を作成した（図 4）。書見台の作成方法については岡本幸治氏の文献⁵に詳しい。ここで紹介された方法は、左右の支持台の大きさが異なり、連結用ボール紙をはさみ込んだ形状のものであるが、今回は展示用ということ意識して、左右同サイズの支持台だけを作成した。書籍よりも若干小さく、展示品を鑑賞する際の邪魔にならないようなサイズとして、書見の天地は 200mm、底辺 105mm、高さ 55mm、斜辺 120mm(折り返し部、のりしろを含めて必要な紙の長さ $35+55+120+105+5+35=355\text{mm}$)のものを標準とした。また、横長本のための書見台も、実際に展示する書籍にあわせて採寸した（図 5）。採寸の計算さえできれば、きれいに仕上げるためにいくつかの注意点はあがるが基本的には紙を切って折っていただくので、どの図書館でも作成可能であろうと考えられる。

これらの作業のための材料としては、アーカイバルボード、両面テープ（通常より強力なもの）のみであり、その他の文具としてカッターナイフ、金尺、カッティングマット、へら（製本用のものもあるが和裁用でも可）、シャープペンシルが必要であった。

おわりに

以上、資料に対する負担がかかる二つの要素として、光と力についてよりダメージの少ない展示方法を模索していることを紹介した。本学の取り組みは本当にささやかなものであり、資料に対して万全であるとはいえない。展示環境については温湿度や防塵・防虫など気をつけなければならないことは他にもある⁶が、博物館と異なり十分な施設がない中でも、資料の取り扱いに気をつけるという小さな配慮を忘れないことが大切なのではないかと考えている。本稿の紹介が少しなりとも他の図書館展示の参考になれば幸いである。

¹米澤誠「広報としての図書館展示の意義と効果的な実践方法」『情報の科学と技術』55(7). P305-309 (2005.7) 図書館展示の意義を広報活動と人材育成の面から位置づけており、理論的な文献としては出色である。

²最も網羅的に展示と資料保存について扱った例として以下の概説書がある。①「防ぐ技術・治す技術：紙資料保存マニュアル」編集ワーキング・グループ編『防ぐ技術・治す技術：紙資料保存マニュアル』日本図書館協会，2005.3. p53-56 ②佐々木朝登「展示室の条件・展示と保存」（新井重三，佐々木朝登編『展示と展示法（博物館学講座；7）』雄山閣出版，1981.5.所収）

³前掲注2②論文 p149

⁴日本図書館協会資料保存委員会編著『目で見える「利用のための資料保存」（シリーズ本を残す；6）』日本図書館協会，1998.4. p23,40 好ましくない展示の実例写真も掲載されている。

⁵岡本幸治「保存作業ガイド」（増田勝彦，岡本幸治，石井健 [著]『西洋古典資料の組織的保存のために：第1回西洋古典資料保存講習会から（一橋大学社会科学古典資料センター Study series；no.47）』一橋大学社会科学古典資料センター，2001.3.所収）

⁶アンソニー・ケインズ，パウル・シーアン，キャサリン・スウィフト著；海野雅央 [ほか]訳編『「治す」から「防ぐ」へ：西洋古刊本への保存手当て：ダブリン・トリニティ・カレッジ図書館における資料保存（シリーズ本を残す；5）』日本図書館協会，1993.5. p52-53